書評

「本願寺史」について

藤島達朗

一

西本願寺が親鸞聖人七百回忌を記念し「本願寺史」の完成を企圖して、故禿氏祐祥博士を主班とし、その編集所をはじめて龍谷大學圖書館内に設けたのは既に七、八年も前のことであつたのであろうか。博士歿後は宮崎圓遵博士がこれにかわり、谷下・千葉・津本・二葉等の諸氏もこれに參劃して業はすすめられた。累年の史料採訪の足は文字通り全國的に最も勢力的に運ばれ、その蒐集はまことに刮目されるものがあつた。もとより初期教團についてはそれは限られてゐるが、室町時代以降のそれが實におびただしい、限られたといつても、宮崎博士による德島縣下に於ける聖人眞蹟十七願文、島根縣の光明本尊等は、全く思いがけぬ發見で、ひとしく驚喜せしめたところである。こうしてまず宗祖より十一代顯如に至る間をもつ（東西分派直前）卷がここに完成した。これは江戸時代の第二卷、明治以後の第三卷、年表、系圖、索引等の別卷と都合全四卷よりなるものの首卷である。すべて五五四頁、章と頁との配分は次の如くである。

一、序說　眞宗教團成立前史　三四頁
二、宗祖親鸞聖人とその教團（十節）　八八頁
三、大谷廟堂の建立と推移（六節）　四二頁
四、覺如宗主と本願寺の形成（六節）　五八頁
五、本願寺教團の漸興（六節）　七一頁
六、蓮如宗主と本願寺の興隆（六節）　八九頁
七、本願寺の社會的發展（八節）　一〇二頁
八、本願寺と織豐政權（四節）　七〇頁

以上によつて大たい本書に於ける叙述の態度とその方向を看取し得るが、第二章祖傳と初期教團の八八頁や、第六章蓮如時代の八九頁は當然ながら、第五章卽ち四代善如、五代綽如、六代巧如、七代存如時代の七一頁は、他の章との比に於いて從來のものにみぬところであろう。古く一般的にこの間は宗史の暗黑時代と稱され、考察も乏しく、叙述も簡素なるを常とした。併し戰後の國史學の發展は、特にこの間の研究に著しい進展を來たし、宗史の力點の一つもここにあつた。ただ問題は史料の缺除で、從來の研究の貧困も主としてそれによるのであるが、山田・禿氏・日下等の諸師の成果をうけ、特に今回の採訪の結果が、ここにみのつたといわねばならぬ。そして最大の頁數は第七章に與えられてゐる。これは八代蓮如以後九代實如、十代證如、十一代顯如の前半の時期である。國史の室町中期以後でこれ又戰後の學界がひとしく問題にした封建再編期の動亂時代である。所謂一向一揆の研究を中心に史界の論稿最も多く集まるところで、本願寺教團の對裝とその變容は注目にあたいする時代であるからである。卽ち全體として學界の動向にそい、新

しい史觀になるものであることが認められるのである。

二

次に特に本書に於いて注意せしめられるのは第一章の序說である。僅々三四頁にすぎないが、編者はここで日本佛教史の流れを、所謂親鸞史觀によつて概觀し、以て親鸞とその教團の日本佛教史上の地位を明かにしてゐる。卽ち佛教傳來以後の民族宗教的發展と、太子に發する正統的發展の經過を具體的にながめ、神祇不憑、權力不據の態度とその自信教人信による傳導性と平等の人格性の把握による親鸞の宗教とその團體こそが、正しく一大佛教の發展の本流にあり、日本佛教に於ける正統的地位をもつものであることを述べるのである。この分析と叙述はまことに明快をきわめる。ただ本章が「前史」と銘うつ爲、親鸞以後の發展につき、當然のことながら本書の本文にゆづつて一頁餘りしかその「展望」（三二頁以下）が與えられてゐない。これは併し「前史」よりは、はみ出すけれども、序說としてこのあざやかな史觀によつて以後を今少し詳しく要約してほしかつた。勿論本文を注意深く讀めば當然了解されることであり、且つ「展望」にても一應示されてゐるけれども、詳しい本文の叙述は、往々にして讀者をして全體的觀察を失せしめる。とかく一般の識者は、親鸞以後の眞宗の發展を無視し、時あつて親鸞以後清澤滿之まで正しい念佛の信仰は存しないと放言する人すらある。それは主として覺如の廟堂寺院化、法主權の發生、蓮如以後近世に至る封建化等によるのであるが、いうまでもなく宗教は單なる思想ではない。そしてそれが具體的に存在するためには、自ら時代的、社會的たらざるを得ぬ。問題は親鸞と初期教團の非民族宗教的性格、傳導性、人格性等が基礎的條件として存するか否かにかかる。この點「展望」の說示はいささか簡略である。併し編者の立場はあくまでこゝでは「前史」にあるのであるから、これは望蜀の思いといわねばならぬか。

三

一卷の考察は、全體としてこれは既に綿密にして最も穩健中正な歷史學者として定評のある編者のそれの具體例とすることが出來よう。史料に忠實であつて結論は常に公正であること、これは當然のことながら必しも簡單ではない。史料に忠實であるとは、それが深く廣くそして最も妥當な解釋がなされるということである。いわば素純な態度と最も常識的な結論といえようか。そのような立場からは奇嬌な考說が出る筈はないのである。

第五章中に於いて、存覺師義絕の問題が取扱われてゐるが（二〇一頁以下）、これに於いて特にその感が深い。その長い義絕の理由につき、或は教義上の問題といい或は佛光寺了源にからむとなし、甚しきは閨室の事實すら持ち出す向きがあつた。それらに對し編者は留守職相承の權限と本願寺中心主義の後退を危む覺如の立場に於いてそれを考える。これは事件の具體相と關係文書の示す最も素直な結論である。もつともこれにつき早く山田文昭師の論稿があつてこれに關說されてはゐるが、これほど明快ではない。

このような點は隨所に存するが今一々それをあげる豫猶はな

い。一言以てこれを言えば全副的な信頼感を以て讀めるということである。たゞさすがに本山版「本願寺史」の下にての宗祖の遷化地につき、「本願寺では」と斷つて、廣如所定の角坊別院を出さねばならない（一二二頁）、又やむを得ない仕儀とすべきか。

なを氣のついた一、二をつけ加えれば、一六七頁の、大谷派本願寺藏「本願寺聖人親鸞傳繪」四卷（重文）は、「本願寺聖人傳繪」が正しい、又第一、二章中に、「眞宗原始教團」「眞宗初期教團」と、「原始」と「初期」が兩方用いられてゐるが、これは「初期」に統一した方がよろしいのではないか。

以上いろ〳〵述べたが、とにかく劃期的な編著である。全四卷の完成をひたすら待望する次第である。それは正しく今期眞宗史學の記念塔となるからである。筆をおくに當つてすぐる六百五十回忌に東本願寺が山田文昭師に編せしめた「本願寺誌要」を思い、彼此全く今昔の感にたえぬものをおぼえることである。